

五十嵐 匠 監督作品

サワダ

SAWADA

青森からベトナムへ
ビュリツツアー首カメラマン沢田教一の生と死

■愚直…という五十嵐監督に怒られるかもしれないが、かつてドキュメンタリーをつくっていた人間としては、あえて映像的、そして映画構成上のテクニック、いってみれば形容詞の類を排除して、野球でいえば直球一本槍で、カメラマン沢田教一の死までの軌跡をひたすら追った映画に強烈な新鮮さを感じた。



■ベトナム戦争は、最前線の兵士たちの非道な行為や、そこで必死に逃げまどう民衆を撮影するという、戦争報道としてはかつてないことができた異例の戦場であった。多くのカメラマンたちがそこで進んで危険

に身を挺して報道に当たったことが、ベトナム反戦の気運を生み出すのに大きく貢献している。沢田教一はその重要なひとりである。

に身を挺して報道に当たったことが、ベトナム反戦の気運を生み出すのに大きく貢献している。沢田教一はその重要なひとりである。

この映画は、この稀な機会に全身でのめり込んで短い生涯を完全燃焼して終えたひとりの人の人生を描いている。その生と死。職業における技術と人間性と野心あるいは使命感。そして記録とは何かという問題。これはドキュメントとは何かということについてのドキュメンタリーでもある。

この映画は、この稀な機会に全身でのめり込んで短い生涯を完全燃焼して終えたひとりの人の人生を描いている。その生と死。職業における技術と人間性と野心あるいは使命感。そして記録とは何かという問題。これはドキュメントとは何かということについてのドキュメンタリーでもある。

田原 絳一郎 ●ジャーナリスト

佐藤 忠男 ●映画評論家



■戦争は、それだけを写しても、衝撃的な写真になる場合が多い。その中で「プロ」になる条件は、腰が座った写真を撮ることだ。さらに一枚一枚の写真に、迷いがほとんど見られないことだろう。沢田教一はその点、紛れもなく「プロ」だと思う。

過酷な戦場では冷静で鋭敏な判断が要される。彼は自分の視点を見失うことなく状況を把握し、的確に事実をカメラに納めた。

最前線で戦う兵士の、しかし紛れもない人間であることの苦悩……。同時に、村に住むベトナム人やカンボジア人の東の間の平和……。彼は、見逃すことなくフィルムに刻んだ。沢田教一の人間としての深みが、一瞬を普遍化させたことをこの映画は教えてくれた。

私はこの映画に5年間追いついただけの重みを感じた。

大石 芳野 ●フォトジャーナリスト

まだ死ぬ準備ができておりません、まだまだこれからです。サタ殿



●トンキン湾事件発生。ジョンソン大統領は北ベトナムへの報復爆撃を命令
カメラマン岡村昭彦氏と出会う

●米軍の恒常的北ベトナム爆撃開始
UPIサイゴン支局に赴任
「安全への逃避」世界報道写真展でグランプリ受賞

「安全への逃避」がビュリツツアー賞受賞
●米軍の派兵が朝鮮戦争を上回る(32万8000人/10/3)

881高地の戦い・4月、コロラド作戦・7月、875高地・11月、ブドフの戦い・12月など最前線に戦う
●米兵戦死者1万人を超える

●元(旧正月)に北ベトナム・南ベトナム解放民族戦線が南ベトナムの主要都市を一斉攻撃
フエ王城の戦い繰る
●米・北第1回/パリ会議
UPI香港支局員に赴任
●ホーチミン主席死去
●ソム村虐殺事件発覚

サイゴン支局に再赴任する
ブンベン支局長フランク・フロッシュとブンベン南、国道2号線上で射殺される

64 東京
65 サイゴン
66
67
68 香港
69
70 ブンベン

●私は展覧会に出すための写真を撮りに行きますー沢田

●沢田にとってベトナムは日本を逃げ出すいい機会だったんだーキム・ウイレンソン(元UPI記者)

●いよいよという時になって(へり)に乗り込んで来たのが日本のカメラマンだった。ぶん限ってやろうかと思つたよーエディ・アダムス(元APフォトグラファー)

●沢田は本当に競争心が強かった。僕に10日間もくらいついてきたんだーピーター・アーネット(元AP記者)

●沢田は写真が発展するのをわかっていて、それが彼のセンスだったーボブ・ケイラー(元UPI記者)

●戦争は人間にとって一番エキサイティングなものだータイム・ヘイズ(フリーランス・フォトグラファー)

●戦争が沢田に追いついたなと思ったーダーク・ハルステッド(元UPIサイゴン支局長)

UPI: ユナイテッド・プレス・インターナショナル。UPIはAP(アソシエイトド・プレス)に対する通信社として1907年に設立された

沢田教一没後50年企画。24年振りに35mmフィルムでの貴重な上映!!

2020年11月3日[火・祝] → 11月15日[日]

東京都写真美術館ホールにて公開。*11月9日[月]は休映日となります。

タイムスケジュール 各回定員入替制/座席指定 ●11月7日[土] 13:30からはゲストを招いて特別シンポジウムを開催いたします。

*11月7日[土] 13:00からの上映はありません 入場料1,000円[税込] (前売り券使用可能)

作品内容お問い合わせ先: 株式会社グループ現代 Tel: 03-3341-2863 協力: 青森県立美術館

前売り券 1,000円にてチケットぴあにて発売中。

(インターネット、コンビニにてお買い求めいただけます)

当日一般1,500円[税込] シニア1,200円[税込] 学生、中学生以下1,000円[税込]

◎会場/お問い合わせ

東京都写真美術館ホール

Tel: 03-3280-0099 (代表) HP: www.topmuseum.jp

JR恵比寿駅東口改札より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分。恵比寿がデンプレイス内